**能・第一**

**能楽堂**

能は14世紀以来、いくつかの流派で演じられてきた日本の伝統的な演劇の一つである。主人公のシテ役とワキ役を演じる役者に加えて、能には、地謡と囃子の音楽担当、舞台世話係、および解説と物語の会話を請け負う謡手が存在する。謡手はたいていの場合、声よりも姿勢と動きを通してその感情を伝えるシテの台詞を読む。能役者は通常、特定の人物の本質を表現するために能面を着用する。これにより、表情の範囲が大きく制約される。これらの制約があるため、能役者はその動きによって微妙な感情を想起させることができなければならない。

能は当初屋外で演じられた。その伝統は後の壁に描かれた松の木と舞台上の屋根で表現されている。屋根を支える4本の柱はこの美観を補強し、また、能面を着用しているため舞台のほとんどを見ることができないシテの重要な視覚的目標になっているのである。主舞台である橋がかりにつながる屋根付きの橋は、主舞台での演技以外の旅行や状況を演じるために使用されている。

**能面**

能面は、能の発展のはじめから根幹にあたる部分であった。能面は役者の顔を覆うものであるが、顔を上下に傾けることで、能面の表情が柔らかくも、固くもなるような方法で彫られている。当初はさまざまな異なる能面が使用されていたが、特定の共通の特徴が徐々に特定の性格や原型にまとめられた。

翁と呼ばれる老爺にのみ使用される面に加えて、能面はさらに、長老（尉）、女、男、鬼神、精霊（霊）などがあり、これらの種類には、多くの関連するサブタイプがある。60種類の一般的な人格は、さらに250以上の様々な人格に細分化できる。博物館のコレクションは能に関するあらゆる分野にわたり、20世紀の最初の数十年に井伊家の15代目、井伊直忠（1881〜1947）によって委託または収集された能面も含まれている。